

〈英文法の鬼〉と AI

霜 康司

1. 〈英文法の鬼〉と〈デビル〉

日本経済新聞の文化欄に〈私の履歴書〉というコラムがある。企業経営、政治、経済、文化、スポーツなどの領域で大きな業績を残した方々が自らの半生を語る。さまざまな生き様があるものだといつも感心させられるが、各界のリーダーたちが異口同音に、高等学校で英文法をたたき込まれてありがたかったと語っているのには驚かされる。中には〈英文法の鬼〉とあだ名されていた先生のおかげで英検1級を取得したとか、留学の際にライティングのグラマーはしっかりしているとほめられた、などというエピソードも出てくる。改めて日本の英語教育の質の高さに頭が下がる思いだ。

実は私の高等学校にも〈デビル〉と呼ばれていた英語の先生がいらっしゃった。キビキビとした授業、折り目正しい振る舞い、時折交えられる雑談の妙味など、生徒たちは皆緊張しながらも楽しんで受講していた。しかし、毎週出される課題がとんでもない量で、真面目にやっても半分もこなせず、あまりの苦行から歴代のようにあだ名されていたのだった。その厳しい指導に耐えたおかげで、私は英語が得意になったと思っているが、おそらく当時はそのような先生があちらこちらの高等学校にいらしたのではないかと思う。

2. 英文法と大学入試の親和性

高等学校で英文法の名を冠した授業がほとんど行われなくなって久しいが、以前と変わらず英文法に力を入れておられる先生方も多いと聞く。それも当然で、大学入試では英文法の問題が相変わらず出題されているからである。

(1) This is Kate, ().

- ① a friend of mine ② a my friend
③ one of my friend ④ one of friend of mine

(高知大学 2025 年)

(2) 間違っている箇所を①～④の下線部から一つ選
びなさい。

- ① Although numerous attempts ② to solve
the complex ③ equation, the mathematician
④ struggled to find a viable solution.

(青山学院大学 2025 年)

[正解] (1) ① (2) ① Although → In spite of

こうした文法・語法・語彙問題は、国公立大の入試でも私立大の入試でも大きな比重を占めているが、上の問題の出題内容に注目してほしい。〈a friend of mine 型〉も〈接続詞と句前置詞の違い〉もセンター試験で頻出だった項目である。それは同時に、生徒がライティングでつまづくポイントとも重なる。生徒の答案に同じ間違いが目立つからこそ、大学入試でも繰り返し出題され続けるのである。

3. 英語教育と AI

さて、英文法的重要性は変わらないが、英語の学習環境は大きく変わった。教室ではリスニング、スピーキングだけではなく、英文法学習でもタブレットが利用されるようになった。大学入試問題ではおびただしいほどのインターネットの素材文が出題されている。いよいよデジタルデバイス抜きに英語教育を語ることはできなくなってきた。

そして、これまで以上の大きな変化が AI と共にやってくる。今の AI は数年前の精度とは雲泥の差で、翻訳や要約などの高度なタスクを一瞬で実行してくれる。多少の間違いはあっても、十分実用に耐えられるレベルだ。英文法の質問に対しても丁寧に具体例を挙げながら答えてくれる。指示を出せば、特定の事項を含む小テストも作ってくれるし、たとえ愚問を投げかけても、課金さえしていれば、無限に付き合ってくれる。望むなら、現在の自分の英語力をチェックし、それに基づいて 4 技能別に学習プ

ランを立てさせ、教材を提供させ、指導させることもできる。しかも定額でだ。

今やタブレット、スマホ以外に教材がなくても英語学習が完結できるようになったといっても過言ではない。当然のことながら英語の先生方の役割も変わりつつある。私もほんの数年前まで、何十冊もの生徒たちのノートに書かれた和文英訳・自由英作文を添削することで週末を費やしてきたが、今やその必要はほぼなくなった。先生方にとっても生徒にとっても、生活が変わるほどの変化である。

このような時代にあって、英語の授業で生徒の好奇心を刺激するには、単独の知識を説明するだけでは難しいというのが私の実感だ。単発の疑問点には AI が丁寧に答えてくれるし、その使い方さえわかれば英語教師の出番はあまりない。おそらく学校でも塾でも、生徒からの質問の数は今後激減してゆくのではないか。

では先生も教材も不要になる日が来るのかというと、そんな日はきっと来ない。なぜなら、〈英文法の鬼〉や〈デビル〉と呼ばれるカリスマから与えられた課題だからこそ、生徒たちは無理をして期限内にこなしてきたのである。一方、AI は無限に付き合ってくれるが、無限に待ってもくれる。少なくとも当面は、必死になって AI の指示に従う必要はないのである。

4. AI 利用の授業はどこを目指すのか

最近のアメリカのニュースで、No Kings と書かれたプラカードを持っている人たちが映し出されていた。そこで私は生徒たちに次のような質問を投げかけてみた。

「この No Kings のスローガンで Kings はなぜ複数形になっているのかわかりますか？」

すると、皆すぐにスマホやタブレットに質問を打ち込み、その答えを見てうなずいたり、顔をしかめたりしている。

「そうだね、I like apples. や I have no friends. と同じで、可算名詞は無冠詞複数形で、その名詞が表す種類全体を表す。総称と呼ばれる用法だね。では、これもよく見るスローガンですが、ここはなぜ複数形になっているのだろうか？」

No More Hiroshimas

もうスマホやタブレットに触る生徒たちはほとん

どおらず、皆こちらに注目してくれている。

「複数形になっているから固有名詞として Hiroshima を使っているわけではないですね、Hiroshimas と複数形の可算名詞として使うことで『広島のようなこと』はもういらない、という意味のフレーズになります。このように固有名詞でも可算名詞として使うと固有名詞ではなくなるのです。」
 (『アップグレード』 p.233 〈不可算名詞として使う egg〉, 〈可算名詞で使う coffee〉参照)

英文法に限ったことではないが、関連事項に流れをつけて、理解を広げられるかどうかがよく授業になる決め手である。参考書でも同じで、それぞれの項目は独立しているように見えても、その配列次第で理解が広がるのである。さらに、関連性を見いだせた喜びが次の項目に進む力も与えてくれるのだ。

さて、時間が逆行することはないが、私の若い頃に AI があれば、私は添削から解放され、どんな週末を過ごしていたのだろうかと思案する。家族に優しく接することもできたかもしれないし、生徒たちと人生について語り合えたかもしれない。しかし、よくよく振り返ってみれば、当時の生徒たちは AI に尋ねるように気楽な気持ちで添削ノートを提出していたわけではなかった。彼らは時間をかけて考え、調べ、推敲した答案をしばしば緊張しながら私に手渡してくれた。こちらも、単に添削するだけではなく関連事項の説明も加え、ときには『アップグレード』のコピーを貼り付けたりしながら、最善の指導になるよう心がけて添削した。かつての教え子たちはほんの 1 年にも満たない付き合いであったにもかかわらず、何年経っても年賀状を送ってくれ、それが無意味ではなかったと教えてくれる。

いくら饒舌に AI が語ろうとも、人の気持ちを動かすことはまだ難しい。もちろん、AI の作り出したバーチャルな人物と恋に陥るという事例も耳にはするが、まだ恋愛の主流にはなっていない。ましてや恩師たちと同じようなオーラを持つ AI など登場しないのではないか。今後も AI は劇的に進化してゆくだろうが、先生方がそれを使いこなし、生徒たちに寄り添い、彼らを鼓舞し、導いて、新しい英語教育の伝統をつくられることを、切に願っている。

(PRODIGY 英語研究所 主宰)